嘘吐き少年と探偵部

日高鳴海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

嘘吐き少年と探偵部

【Ｎコード】

Ｎ８８３２Ｚ

【作者名】

日高鳴海

【あらすじ】

やぁ、初めまして興津惣介です。この物語は主人公である僕が今時のライトノベルのようにチートな能力を持ち、最強の運動能力に天才的な頭脳、そして様々な女の子にモテてモテてモテまくる物語です。――――――――冗談だけどね。

プロローグ

僕の名前は興津惣介〈おきつそうすけ〉。
どこにでもいる普通の高校生だ。中肉中背で勉強も中クラス。
そんな平凡な僕には幼なじみがいる。幼なじみは絵に描いたような優等生でいつも僕を起こしにくる厄介な存在だ。
友人には悪友に女友達。女友達はサバサバしていてなかなか仲が良いと思う。女友達も結構な美少女であるが男らしい面があり女の子の憧れの的だったりする。
僕が通う学校の生徒会長は学校のアイドル的な存在で、非公式ファンクラブも存在する。生徒会長は僕の従姉で、凛とした雰囲気を持っているが僕と一緒の時は甘えん坊で困ったものだ。
クラスメートの委員長は僕が女の子と話していると強く当たったりしてくるツンデレな女の子。
委員長も美少女であり、眼鏡もとても似合っている。
クラスの担任は僕と血の繋がった実の姉であり、担任も僕に甘えてくるブラコン姉で、僕に依存した傾向があるため、そろそろ弟離れも必要なんじゃないかなと思う。
最近転校してきた金髪の美少女は滅茶苦茶胸がデカい。外人だとフレンドリーな人が多いらしく、転校生も例外ではなくよく僕の背中に引っ付いてきたりする。
僕の周りには女の子がいっぱい。

最高！　ハーレム生活！

美少女に囲まれたこんな日常。
それが僕の日常だ。

――――――冗談だけどね。

第一話

「あー、暇ねー……」
「それ程平和って事じゃないか。良いことだよ」

机にうつ伏せながら、梨子さんはつまらなそうに呟く。
僕たちがいる場所は三階建ての二階にある図書館の隣にある本の物置。
物置といっても部屋すべてが本で埋め尽くされているわけではなく、段ボールが数箱横にあるくらいで、普通に部屋として使用可能だ。

「そうだけどさ……平和すぎるとせっかく探偵部を作った意味ないじゃない」

探偵部。
それは今年の春に井上梨子が創立させた部活名だ。部長井上梨子。部員一興津惣介。以上。

過去に僕たちは連続殺人犯を見事な名推理で解決し、僕たちの存在はこの羽山高校内では知らない人が居ないくらい有名人になった。

冗談だけどね。

「はぁ……暇ねぇ」
「そうだね。あ、梨子さん」
「なに？」
「この本面白い」
「……どんな本なの？」

お、食いついてきた。

「ドロドロの昼ドラのような恋愛小説。一人の男と二人の女が……まぁ、取り合ったりしている小説」

「……本当に面白いの？」

「冗談だよ。すっげぇ面白くない」

「あーあー、でたでた。惣介の口癖」

呆れた声色が梨子さんの口から出てくる。

口癖、仕方がないじゃないか。冗談を言うのは僕のキャラ何だから。

「いっつもどうでもいい嘘つくわよね」

「良いじゃないか。誰にも迷惑をかけていないでしょ」

「まぁ、そうだけど……」

「……僕が話しかけたのは本の事じゃない。良かったらこれをやらないかと思ってね」

後ろの古いタンスから盤と駒を出す。

「将棋？」

「うん、これなら暇つぶし位にはなるよ。それに頭使うから頭の体操にもなると思うし」

「なるほど……わかったわ」

少しだけ乗り気になった梨子さんは身体を起こし、僕が将棋盤と駒を並べるのを待っている模様。彼女の中では自分で並べるという考えは一ミクロンも無いようだ。

僕が駒を並べ終えると、

「始めるわよ。あ、何か賭けしながらやらない？」
「賭け？　マネーとか？」
「えぇ、その方がやる気が出ると思うから。で、どうする？」
「別に構わないよ。僕は損しないしね」
「言ってくれるじゃない……！　いいわ、何円賭ける？」

さて、どうしよう？
僕の財布には諭吉が十枚ほどあるんだよね、冗談だけど。
本当のことを言うと福島県生まれの黄熱病原研究をしていた偉人が二人眠っていて、小銭は百円四枚と五円玉二枚、一円玉九枚ある。
我ながら小銭の使い方が下手くそだなぁ。

とりあえず最初だから、こんな物にしておこう。

「じゃあ百円から」
「へぇ、無難ね。私も……ホイ」

チャリン、と机に百円を置く。

さて、始めるか。

◇◇◇◇◇

「……」

梨子さんは将棋盤を睨みつけるように見ている。理由は今の勝負状況にある。
僕は将棋を割と嗜んでいて、自分で言うのもあれだがなかなか強いと自負している。

さて、本題に入ろう。
はっきり言うと梨子さんの駒は王将しか存在せず、周りには僕の駒が死角なしに取り囲んでいて、王将を動かした瞬間、梨子さんの王将が僕の物になるだろう。
しかも、梨子さんの持ち駒はゼロであり、十割敗北が決まった試合。

「で、どうするの？　君の負けは決まっているけどね」
「……」
「いやぁ、百円儲けちゃったなぁ♪　悪いね梨子さん」
「……だ」「え？」

将棋盤の端を持ち小さく何かを呟いた。
と、いきなり信じられない行動をしてきた。

「うわぁぁぁぁ、地震だぁぁぁぁぁ」

限りなく棒読みに近い声で端を持っていた両手を左右に揺らし始めた。

「ちょ、なにやってんの梨子さん！」
「……ふぅ」

揺らし終わった梨子さんは何故かやり切った感を表情に出しながら制服の袖で前髪を上げ汗を拭いている仕草をする。

あーあ、駒が床に転がっちゃってるよ。

「いやぁ、まさか地震が起きるなんてー。不幸すぎたわね。これじゃ、もうあの局を続けることは無理ね。じゃ、仕方無いからもう一回やりましょうか」

「……もういい」

多分これ以上将棋を続けても無限ループだろう。続けても無意味だ。

「そう、しかし頭を使いすぎて疲れ――――」

僕が床に散らばった駒を拾い集めていると、ふと梨子さんの声が不自然に途切れた。

「ん？　どうしたの？」

「……人が、人が落ちてきた……」

「え？」

耳を疑う発言が梨子さんの口から出てきて、その発言を確かめるために窓から下を見る。

下には……

「……夢に出てきそうだね」

「……」

……グチャグチャになった死体が、そこにはあった。校庭にいた生徒が下で大騒ぎ。

「……投身自殺、かしらね？」

「……多分ね」

爪を噛みながら小さく、弱く呟く梨子さん。

投身自殺。

そうとしか言えないだろう。

ドラマや漫画のように他殺だ！　なんて事は無いと僕は思う。

「今日は帰ろうか。警察が来たら帰りづらくなるし」

「……そうね」

梨子さんは同意し、バッグを持ち部室を後にする。

第二話

次の日。
僕が通う羽山高校は全校集会が行われた。
昨日転落死をしてしまった生徒は二年三組所属だった笹木高義。
この名前を知らない人は居ないのかもしれない。笹木高義は男から妬まれるような容姿を持った男で、女子達からはアイドル的な存在だったりする。
学力も高く、運動も出来る完璧超人。欠点なんて存在しないと思われているが、変な噂もある。
それは自分のルックスを生かし、複数の女の子と交際をしている、という噂。
モテない男子が笹木高義の好感度を落とすために流した、という事になっているのだが。

全校集会では亡くなった笹木高義へ合掌や黙祷したり、屋上の使用を全面禁止などという話しをして終了となった。

全校集会が終わったら、今日は授業せずに帰宅ということらしい。
しかも三日休校になるようで、学校へ入ることも禁ずるみたい。

自宅に帰って寝ようかな。
ゲームのし過ぎで眠いんだ。

と、思っていたのに。

「どうもおかしいのよねぇ」
「そうだね。おかしいよ君が僕の部屋に居るなんて」
僕は普通の二階建ての家に住んでいて、家族構成は父に母、そして僕の三人家族。父と母は共働きで昼間には二人とも居ない。つまり、僕と彼女しかこの家にいない。

「別に良いじゃない。暇なんでしょ？」
「暇じゃないよ。僕にはやることがあるんだ」
「なによ」
「睡眠」
「それでね、笹木高義が――」
無視……っ！　圧倒的な無視……っ！
まぁ、眠いの件は冗談なんだけどね。
実は僕の家に先回りしていた梨子さんに捕まったのが事実。

「自殺じゃないような気がするのよね」
「根拠は？」
「女の感」
だめだこりゃ。
根拠を女の感で片づけるなよと思う。

「冗談よ。たまには嘘を吐かされる気分になりなさい」
「うわー、嬉しい気持ちだぁ。ありがとう梨子さん」
「いだだだだだっ！　言ってる事とやってる事が全く違う！　痛

い！　謝るからグリグリ攻撃止めて！」

満面な笑みを浮かべながらクレヨン×んちゃんのお仕置きのような攻撃をやり続ける僕。

自分が冗談を言うのは良いけど、他人がやるのは不愉快だ。これは冗談じゃないよ。

僕は渋々解放すると、梨子さんはグリグリされた箇所をさすりながら涙目で睨みつけてきた。

「で、本当の根拠は？」

「あんな事してから普通に話しかけるのねアンタ……まぁ、寛大な私は許してあげるわ」

小さい発育なんてあるのか、というぺったんこな胸を張り威張る。

「根拠……いや、違う。疑問点何だけど、何故笹木高義は屋上から飛び降りたか、なのよ」

「自殺したかったからじゃないの？」

「……仮にそうだとして、わざわざあんな高い所から飛び降りなくても、三階の窓からでも一発で死ぬだろうし、トイレから落ちても死ぬ。こんなに選択肢があるのにどうして……」

……確かに、わざわざあんな場所に登って死ぬ意味が分からない。トイレの窓は高校生が一人潜れる位の大きさで、落ちようとすれば簡単に落ちれる……。

「それに屋上は常に解放されていた訳ではないのよ」

「……」

「天文部と先生だけが屋上の鍵を使える……つまり」

「誰しもが屋上に足を運べる訳じゃない」
「その通り」
そう言えば屋上に行こうとする人を見たことが無い。
何だかよくわかんなくなってきたな。それ以前に天文部なんて部活があったことが驚きなんだけれどね。
「そこで……」
梨子さんはバッグの中を漁り始め、何かを探しているみたい。
「これよ」
梨子さんは一枚の紙を一人暮らしに役に立つような小さめのテーブルに差し出してきた。
「……梨子さん」
「なに？」
「個人情報を盗む事は犯罪ですよ」
出してきたのは一人の女子生徒の個人情報。
白黒コピーの為、ブチている所も多少あるが、あまり気にならない程度だ。
「まぁ、お父さんのパソコンからちょろちょろっとね」
「お父さん……？　お父さんも犯罪者なの？」
「もっ、て私も犯罪者前提で話ししないでよ。私のお父さんは校長よ」
「……」

いきなりのカミングアウトに僕は目を丸くする。そう言えば校長先生の名前は井上恭二だったか。よくある名字だったら気にも留めてなかったな。

「意外と楽勝だったわ。昨日お父さんは色々忙しかったみたいだしね」

「……で、この女子生徒がどうしたの？」

「この子が、唯一の天文部部員なのよ！」

天文部は一人しか居ないのか……。

一人しか居ない……つまり彼女が生徒の中で唯一屋上に行ける人物。

「これには住所も書いてあるし、お邪魔してみない？」

「……嫌だ」

「えぇ！？　何だかいい感じに進んでたのに！？」

ガーン、とショックを受けたような表情になる梨子さん。

「冗談だよ。行くなら早く行こう」

「〜〜〜〜〜〜ッッッ！！」

地団駄を踏む梨子さん。どうやらめちゃくちゃ悔しいらしい。

僕は部屋のドアを開けようとした刹那、身体を右に寄せた。

ゴン！　と梨子さんはドアへと熱いキスをする。

「何やってんの？」

「さっきやられたグリグリ攻撃をしてやろうと思って……何で避けんのよ！」
「痛いからだよ」
「私だって……私だってやり返す権利はあるはずよ！」
そう言って梨子さんは僕に襲いかかってきた。
が、僕は再びそれを回避する。
「早く行かない？　日が暮れちゃうよ？」
「ぐぅぅ……！　何時かやり返してやる……！」
怨念じみた声をＢＧＭを聞き流しながら僕は家を出ていった。

第三話

徳山香織。
羽山高校二年一組所属。
成績はあまり思わしくないが、体育はずば抜けた部分がある。
部活は唯一の天文部。

「ふむ……」

僕は徳山香織さんの家に行く道のりで梨子さんが盗んだ情報を確認しながら僕は理解するように頷く。
この個人情報がだだ漏れの紙には残念ながらスリーサイズは書かれていないが、必要最低限の情報は全てこの紙に記されていたりする。
彼女の家は僕の家から大体十分やそこらで行けるなど、意外と近所に住んでいる事がわかった。

「徳山、徳山、徳山……あ、ここね」

表札には徳山と書かれていて、住所も一致している。
ここか。徳山香織さんの家は何処にでも有りがちな普通の二階建ての家で、庭には大きめの柴犬が犬小屋にてスヤスヤと寝ている。
梨子さんは躊躇うこともなくインターホンを押す。
ガサガサガサ、と電子音がインターホンから聞こえてきたかと思うと直ぐに女性の声が聞こえてきた。

『どちら様でしょうか？』

「私は羽山高校に通う香織さんの友人の井上梨子と申します。香織さんはいらっしゃいますでしょうか？」

真顔で嘘を発する梨子さん。嘘つくのは僕の専売特許なのになぁ。

『香織は今風邪で寝込んでいまして……』

「あ、そうなんですか。付かぬ事を伺いますが、いつから風邪をひかれていますか？」

『三日前からですけど……それがどうかしました？』

「いえ、特に意味は。では、香織さんにお大事にとお伝えください」

『わかりました』

インターホンが切れる音が聞こえた。

どうやら上っ面だけの会話が終了したようだ。

「う、うがァァァァァ！！　痒い！　身体中が痒いィィィィィィ！！」

突然叫びだしたかと思えば背中やら腕やら身体のありとあらゆる箇所を掻き始めた。ちなみに、激しい動きをしている所為なのかパンツが丸見えだ。白と水色のシマシマのパンツなんて二次元だけの産物だと思っていたよ。

「どしたの？」

「慣れない敬語を連発したから滅茶苦茶痒いのよ！　あー、痒い！」

敬語アレルギー。

どこのキャラ設定なんだよ。まぁ、僕も人の事言えないんだけどね。

「で、背中を掻いてないで早く立って。端から見たら不審者だよ」

「え、えぇ」
未だに痒いのか、腕を掻きながら立ち上がった。

◇◇◇◇◇

「なる程ね」
一旦僕の部屋に戻った僕達は一息をつく。
だが、梨子さん。何がなる程なんだ？
あの会話で分かった事なんて殆ど無いと思うんだけれど。
まぁ、とりあえず聞いてみようかな。

「何が分かったの？」
「そんな事も分からないの？　バカねぇ」
まるで出来の悪い息子を持ったかのような哀れみを含んだ目で僕を見てくる。
失礼な。僕はね、中学時代には模擬試験全国一位を取ったことあるんだぞ。冗談だけどね。
「で、そんなバカな僕にとぉっても分かり易く教えてくれないか？
何が分かったかを」
「うん、まず分かった事は徳山香織は犯人である確率が格段に減っ

たこと」

……あぁ、何となく言いたいことが分かった気がする。

「徳山香織は三日前から風邪で学校を休んでいる。転落事故が遭ったのは昨日。つまり、笹木高義が死んだ日は徳山香織は居なかったことになる。まぁ、あの母親の話しが本当ならね」

「嘘は吐いてないと思う。風邪を引いてる引いてないどちらにしろ、徳山香織さんは家から出れないと思う」

「どうして？」

「多分徳山香織の部屋は二階だ。熊や猫のぬいぐるみが外から見えたからね」

「冗談じゃないわよね？」

「当たり前さ。僕は世界一の正直者だよ？」

「今！　今酷い嘘を吐いた！」

酷い嘘とは心外だな。

僕はわりかし良い嘘を吐くと思うんだけれど。

あ、嘘って言っちゃったよ。

「話しは続けるけど、一階には母親がいて外に出るのは無理。二階から降りようとしても怪我してしまうかもしれない」

「でも、ロープか何かしらで下に降りれるかもしれないじゃない」

「よく考えてみ？　それ以前にだ。わざわざ体調が悪い日を使ってまで笹木高義を殺す意味じゃないか。風邪引いてると頭の回転が鈍って変なミスするかもしれないじゃないか。僕だったら身体が完璧な体調の時に実行するね」

「た、確かに……」

笹木高義が他殺という話しで進めているが、本当に他殺なのかも悩

ましい所だけど。

「ん～……分からないわね」

「これって本当に自殺なんじゃないの？」

「そんな事無いわ！　これは絶対に他殺よ！」

「根拠は？」

「私見たのよ……落ちた瞬間、顔が血で赤くなっていたのを！」

グワッ！　と驚かすような仕草で僕に言う。

……。

「気のせいじゃない？」

「気のせいじゃないわよ！　私動体視力は良い方なのよ？」

「……」

「全然信じてないわね……じゃあ、証拠を見せてやるわ！　惣介！」

何だか久々に僕の名前が出て来たような気がする。僕の名前は興津惣介だよ。忘れないでね。

「なに？」

「庭に出なさい。あ、ボールある？」

「うん、軟式ボールなら」

「そのボールにマジックで何かを書いて、投げたボールを見て何を書いたか当ててみせるわ」

「……」

まぁ、付き合ってやろうかな。僕はボールの側面に適当な日本語を書いて、梨子さんに見せないようにボールをポケットに入れ、庭に向かう。

「さて、投げなさい惣介！」
「はいよー」
庭に来た僕達は居間の部屋の窓を開け、そこに座る梨子さんに、僕は自宅のコンクリートで出来た壁に軟式ボールを投げた。軟式ボールはコンクリートに叩き付けられ、コロコロと少し転がる。
「憂鬱、ね」
「……おぉ」
僕は素直に感服した。軟式ボールを拾い上げ、僕は梨子さんに軽く下投げで渡す。
軟式ボールを受け取った梨子さんは確認するように軟式ボールを見た。
そして確認したかと思えばドヤ顔を僕の方に向けた。何だか無性に腹が立つ。
「どうよ、これで信じてくれるかしら？」
「……まぁ、そう言うことにしておこうかな」
「やーい、悔しいんでしょー♪　って、いだだだだだ！！　グリグリしないで！　ゴメンナサイ！　調子に乗りすぎていましたァァァァ！！」
◇◇◇◇◇

グリグリ攻撃をし終えた僕は居間に座り込む。
さて、本当に梨子さんの動体視力は凄いのかもしれない。その動体視力を信じるとして、顔が血で赤くなっていた……もしかしたら屋上で頭でも殴られたというのか？
だったら、血が屋上に付いているはず……だが，ニュースでは自殺と報道されていた……。
血を完璧に拭き取った……？

「ねぇ梨子さん」
「……何よ」

うわぁお。不機嫌度ＭＡＸじゃないか梨子さん。
まぁ、気にしないで僕は話を進めよう。

「屋上って今行ける？」
「屋上……いや、確か警察の人が屋上を立ち入り禁止にしているはずだけれど……」
「ってことは今は無理？」
「うん、無理だと思う」
「じゃあ夜は？」
「夜！？　うーん……多分大丈夫だと思う……何でそこまでして屋上に？」
「ちょっと確かめたいことがあって……」

首を横に寝かせるように傾げる梨子さん。
どうやら僕の意図を捉えきれていないようだね。

「私も行ってもいい？」
「うん、むしろ居てくれた方が都合がいいし」
「……？」

第四話

夜になり、僕は親が寝静まった後家を後にする。説明するのも面倒だし、間違い無く反対されると思うし。

外にある自転車を走らせ学校へと向かう。

梨子さんには家を出る前にメールしたし、ある程度の時間になったら来るだろう。

「ふぅ、いい風だなー」

自転車の走ることによって発生する向かい風を全身に浴びながら僕は呟く。春の夜は少しだけ涼しく、常にこの温度なら嬉しいんだけどなぁ。

そんな事を思いながら自転車を走らせる事一〇分弱。

校門前に来た僕に光が照らされる。

「遅いわよ惣介」

「来るの早いね」

校門には既に梨子さんがスタンバイしていた。

懐中電灯を装備していて、それを僕に当てているみたい。

「そりゃそうよ。メール来た瞬間に家を出たんだし」

「ふぅん」

確か梨子さんの家って歩いて五分位の場所にあるって言っていたし、そりゃ早いよね。

「んじゃ、行きますか」
「えぇ……どうやって入るの？」
「そうだね……」

校門の門は閉じられていて、学校を囲む塀もあるため何時もの通り軽く通れる訳じゃない。
こうなると、やっぱり方法は一つだね。

「登ろうか」
「え？」

僕は門をよじ登り、校舎の中へと潜入する。

梨子さんも続くように門をよじ登る。

「さて、どうやって校舎へ入るか……梨子さん、どっか入れる場所とか知ってる？」
「その辺は抜かりは無いわ。鍵持ってるし問題ないわ」

威張るように鍵を懐中電灯で僕に見せてくる。
校門の鍵も持っていて持ってほしかったな。

「それなら問題ないね。よし、校舎に入ろう」

僕と梨子さんは昇降口に歩いていく。

鍵を開け、行儀よく下履きに履き替え暗い廊下を歩いていく。

「ね、ねぇ惣介」

「なに？」
「ど、どこに行くの？」
怖いのか、僕の服を握りしめながら弱々しく僕に訊いてくる梨子さん。
あぁ、そう言えば行く場所を伝えてなかった。
伝えておかなくちゃな。
「屋上」
「屋上？」
「うん、もし梨子さんの言うとおり笹木高義の頭に血が流れていたとしたら、屋上に笹木高義の血が付着しているかもしれないしね」
「で、でも……屋上は警察の人が調べたってお父さんが言ってたわよ？」
「警察は多分自殺前提で捜査していたと思うし何か見落としている所があるかもしれない」
「……警察ってそんないい加減だとは思うんだけれど……」
「まぁ、一応の確認だから。無かったら無かったで仕方ないと思う」
実際に警察はいい加減なのかもしれない。
普通人が死んだらこんな早く校舎を開放するとは思えない。
やっぱり警察は自殺ということを前提にして捜査していたんだと思う。
この分だと期待できるかもしれない。
僕達は特に会話も無く暗い廊下をコツコツと歩いていく。
屋上には三階の階段を登って行かなければならない。

「あ」
「どっ、どうしたの惣介」
「屋上の鍵って無くても大丈夫かな？」
「大丈夫だと思うわよ。しばらく開放されるみたいだし……」
「そっか、なら安心だね」

それを訊いて安心した。

その後も歩き続け、屋上へと続く階段を登り屋上のドアの前まで着く。
屋上のドアの前にはテレビドラマなどでよく見る黄色いテープみたいな物が貼られていた。
僕と梨子さんはテープを潜り抜け、屋上へと出る。

屋上はコの字になっている柵に一つ椅子があるだけ。

「……暗くてよく見えないわね」

梨子さんの言うとおりだ。暗くてよく見えない。

僕は片膝立ちになり屋上の地べたに手を置く。
屋上の地面はトイレのようなタイル式になっているようで、タイルとタイルの隙間には水を吸収する地面になっている。

「……よし、探そう」
「なにを？」
「血を」
「……あるの？」
「分からないけど、血が染み着いているかもしれないじゃないか」
「そんな後があったら警察が見つけてるわよ」

「確かにね、でももしかしたら見逃しているのがあるかもしれない」
「……そうかしらね」
半信半疑な状態で梨子さんは地べたを身体を下ろして見始めた。
僕も早くしないと。

◇◇◇◇◇

探すこと一時間。
屋上は無駄に広く探すのに手間がかかる。
うーん、やっぱり無いのかなぁ……。
携帯電話の光だけじゃキツいし。バッテリーもかなり減るし。家に懐中電灯が何故無かったのだと今更ながらに文句を言いたくなる。
「……ん？」
ふと僕はあることに気づく。
おかしい。
最初は気がつかなかったが周りと比べると微妙にこの隙間の色が違う……。

「ねぇ梨子さん。ちょっと来てくれない？」
「えーっ？　なにー？」
腰を叩きながら歩いてくる。ずっと屈んでいたから腰が痛いらしい。
それは僕も同じだけどね。

「どうしたの？」
「ちょっと懐中電灯貸してくれない？」
「うん、別に構わないけど」
僕は懐中電灯を受け取り色が違う箇所を照らした。
そこは屋上のドアより二メートル程離れた場所だ。

「僕の気の所為かな？　梨子さんはどう？」
「……微妙に白いような……うーん」

周りの隙間も白いがここの隙間は不自然に白いような気が……。
僕は左手に懐中電灯を持ち、一週間前に切ったばかりの爪で白いような隙間をガリガリと削っていく。
爪の間には白い……ペンキみたいなものが入っていく。間違い無い。
これは上塗りされている。
ガリガリと削ること数分後、

「……やっぱり、ここで殺されたのかもしれないわ……」
削り終わった後の隙間を見て梨子さんは呟く。
確かにそうかもしれない。
削った後の隙間には、薄い広がった血があったから。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8832z/

嘘吐き少年と探偵部

2012年1月6日13時46分発行